



日本现代文学
精品注释丛书

中国日语教学研究会推荐

〔日本〕东山魁夷 著 傅冰 注释 胡振平 审校

东山魁夷美文集

日文版

译林出版社



日本现代文学
精品注释丛书

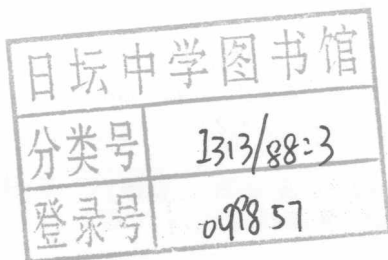
东山魁夷美文集

〔日本〕东山魁夷 著 傅冰 注释 胡振平 审校

译林出版社



日文版



日坛中学



000000099857

图书在版编目(CIP)数据

东山魁夷美文集 / (日) 东山魁夷著; 傅冰注释. - 南京: 译林出版社, 2004. 1

(日本现代文学精品注释丛书)

书名原文: 風景との対話 わが遍歴の山河

ISBN 7-80657-562-6

I. 东... II. ①东... ②傅... III. 散文-作品集-日本-现代-日文 IV. I313.076

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2003) 第 031971 号

Copyright © 1983 1978 by 東山魁夷.

Japanese reprint rights in China arranged with HIGASHIYAMA Sumi through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

登记号 图字:10-2002-003号

- | | |
|------|-----------------------------------|
| 书 名 | 东山魁夷美文集 |
| 作 者 | [日本] 东山魁夷 |
| 注 释 | 傅冰 |
| 审 校 | 胡振平 |
| 责任编辑 | 张远帆 |
| 原文出版 | 新潮社, 1983, 1978 |
| 出版发行 | 译林出版社 |
| 电子信箱 | yilin@yilin.com |
| 网 址 | http://www.yilin.com |
| 地 址 | 南京湖南路 47 号 (邮编 210009) |
| 集团地址 | 江苏出版集团 (南京中央路 165 号 210009) |
| 集团网址 | 凤凰出版传媒网 http://www.ppm.cn |
| 印 刷 | 南京通达彩印有限公司 |
| 开 本 | 850 × 1168 毫米 1/32 |
| 印 张 | 10.75 |
| 插 页 | 2 |
| 版 次 | 2004 年 1 月第 1 版 2004 年 1 月第 1 次印刷 |
| 书 号 | ISBN 7-80657-562-6/I·429 |
| 定 价 | 17.00 元 |

译林版图书若有印装错误可向承印厂调换

前言

进入新世纪后,始于上世纪八十年代的『日语热』并没有降温,随着中日两国交流的增多,更多的国人投入到学习日语了解日本的行列中来。国内也引进和编写了相当数量的日语教科书、参考书和工具书,这都是我们这些从事日语教学多年的人乐于看到的。不过,同时我们也感到,相对于品种繁多的语法指导、单词手册之类,国内的日语阅读材料是明显比较薄弱的一环。有许多学生包括身边一些自学的日语的朋友发出了『无书可读』的感慨。我们一直在思考怎样的日语读本才是最实用的,于是几经酝酿,精心编注,终于可以把眼前这套书奉献给广大读者。

这套由译林出版社出版的『日本现代文学精品注释丛书』,与以往的一些泛读教材和文学选读相比,最大的特点在于其完整性。过去我们编阅读材料,常常因为篇幅的限制和教学的需要,对一些长篇的作品只能节选,对一些难度大的作品要作部分改写。这样做,对于读者来说自然有难窥全貌之憾,于编者亦有割爱之痛。现在这套丛书全部是向日本购买版权,不作任何删改的原文出版,完完全全保留了作品的原貌。据我所知,如此成规模地引进日语原著在中国加入世界版权组织后还是首次,不能不说是日语学习者的一件幸事。

1 我们把这套书定名为『日本现代文学精品注释丛书』,是为了体现在编注中的几个基本出发点。首先,选取的都是『现代』作品,这些作品可以体现现代日语的面貌,提供给读者鲜活的语言。入选的作家也是以语言规范平实见长,是学习者容易模仿并值得模仿的对象。同时,所选作品均在日本现当代文

学史中有一定的地位，在国内也已经有了不小的知名度，是公认的非常好读的『文学精品』。题材虽不尽相同，但无论是散文游记、爱情小说还是悬疑小说，都能引人入胜。当然，这套书毕竟不同于一般的文学作品欣赏，主要是献给日语学习者的读物，它的实用性更多体现在『注释』上，每本书中对需要注意的生僻单词、语法现象和文化常识都做了较为精当的注释。对于日语程度较低的读者，可以扫除他们阅读中的障碍；对于有一定基础的读者，恐怕也有助于日语知识的巩固与提高。除了方便自学之外，这套书可以供老师们选取一些篇章作为泛读课的教材；考虑到入选作品多有中文译本，在教授翻译课程的时候也可作为参考书使用。

这套丛书是一个新的尝试，我们动了不少脑筋，花了不少力气，也一定会存在不少问题。希望大家能欢迎这个尝试，仔细读这些书，提出批评意见，帮助我们这套书出好，并且继续下去。

中国日语教学研究会会长

胡振平

二〇〇三年六月

風景との対話
東山魁夷美文集

第一章 風景開眼^①

① 開眼 / 領悟，由佛教用語轉來，讀作“カイゲン”。

いままで、なんと多くの旅をして来たことだろう。そして、これからも、ずっと続けることだろう。旅とは私にとって何を意味するのか。自然の中に孤独な自己を置くことによつて、解放され、純化され、活潑になった精神で、自然の変化の中にあらわれる生のあかしを見たいというのか。

いったい、生きるということは何だろうか。この世の中に、ある時、やつて来た私は、やがて、何処かへ行ってしまふ。常住の世、常住の地、常住の家なんて在るはずがない。流転、無常こそ生のあかしであると私は見た。

私は私の意志で生れてきたわけではなく、また、死ぬということも私の意志ではないだろう。こうして、いま、生きているというのも、はっきりと意志が働いて生きているわけでもないようだ。したがって絵を描くということも――

私は何を云おうとしているのか。力を尽して誠実に生きるということを尊いと思い、それのみが、私の生きている唯一の意義であるはずだと思つてはいるのだが。それは、上述の認識を前提とした上でのことである。

私は生かされている。野の草と同じである。路傍の小石とも同じである。生かされているという宿命の中で、せいっぱい生きたいと思つてゐる。せいっぱい生きるなどということとは難かしいことだが、生かされているという認識によつて、いくらか救われる。

① なんと～ことだろう/ 多么……啊。(慣用型, 表示感叹。) ② ～によつて/ 根据, 通过。(复合辞) ③ やつて来た/ 来, 到来。(连语, 相当于くる。) ④ なんて/ 等等。(副助词, 同など。) ⑤ ～はずがない/ 不可能, 不会。(慣用型) ⑥ 私の意志で生れてきたわけではなく/ 出生并非我的意志所能支配。(わけではなく是慣用型, 意为并不是。) ⑦ 意志が働いて/ 有意识地。 ⑧ 生かされている/ 意为不由自主地生活。

私の生き方は、こんなふうに、あまり威勢の良いほうではない。生来の性格の上に、多くの挫折と苦悩を経て辿りついた結果である。幼い時から青年期まで病気がちであった。物心のつく頃から、両親の愛憎の姿を、人間の宿命とも、業とも見てきた。外面にあらわそうとしない私の心の深淵。精神の形成される時期のはげしい動揺。兄弟の若い死。父の家業の倒産。芸術の上での長い苦しい摸索。戦争の悲惨。

しかし、私の場合は、こんなふうだったから生の輝きというものを、私なりにつかむことが出来たのかもしれない。私が倒れたままになってしまわずに、どうにか、いろんな苦しみで耐え得たのは、意志の強さとか、それに伴う努力というような積極的なものよりも、一切の存在に対しての肯定的な態度が、いつの間にか私の精神生活の根柢になっていたからではないだろうか。少年期の私は、何事をも疑ってみる時期があった。あらゆる存在に対する不信の思いに耐えられない自己を持てあましていたこともある。しかし、ある諦念ともいうものが、私の中に根ざしてきて、私の支えとなったのだと思う。

私は一年の大半を人気^①の無い高原に立って、空の色、山の姿、草木の息吹きを、じっと見守っていた時がある。それは、まだ結婚もせず、幼稚園に間借りをしていた昭和十二、三年のことである。八ヶ岳の美しの森と呼ばれる高原の一隅に、ふと、好ましい風景を見つけた、その同じ場所に一年のうち十数回行って、見覚えのある一木一草が季節によって変わってゆく姿を、大きな興味をもって眺めたのである。

冬はとくに過ぎたはずなのに、高原に春の訪れは遅かった。寒い風が吹き、赤岳や権現岳は白く、厳しく、落葉松林^{かちまつ}だけがわずかに黄褐色に萌え出している。ところどころに雪の

① 威勢が良い/有朝气,有生机。(慣用句) ② ~上に/而且,再加上。(慣用型) ③ 病気がち/总是生病。(がち接在动词连用形或名词下,表示往往、动辄。)
④ 物心のつく/开始懂事。(慣用句) ⑤ 外面にあらわそうとしない私の心の深淵/并不外露的我的内心深处。(此句以下都是名词句结尾,表示一连串的情况发生。)
⑥ 私なり/按照我自己的方式。(なり是造语,意为那般、那样。) ⑦ 倒れたままになってしまわずに/没有被压垮。(ずに由否定助动词ぬの连用形加格助词に构成,表示没、不。) ⑧ 何事をも/此处保留了表示宾格的助词を。 ⑨ 人気のない/不受欢迎,此处意为人迹罕至。(慣用句) ⑩ 八ヶ岳/位于山梨县的山峰,著名旅游地。

残る高原は、打ちひしがれたような有様であった。その中に、昨年の芒^{すすき}が細く立っているのが不思議であった。深い雪と、烈しい風の冬を経て、頑丈な樅^{もみ}の枝でさえ折れているのがあるのに、どうしてこの細々とした茎が立ちつづけていたのだろう。

春が来ると、一時に芽吹きがはじまる。紅に、黄に、白緑に、若葉に、銀に、金にと、多彩な交響楽。白い素朴な花^③をつけた小梨の下には、虹^④がブーンと弦楽の合奏をしている。鶯と郭公は高音と低音の重唱。躑^{つづ}躑^{つづ}、蓮華躑^{つづ}の華やかさ、どうだん躑^{つづ}の可憐、野薔薇の清楚。

霧が流れ、雨が降る。夏の陽が輝くと、草いきれのする野に、放牧の馬の背が光る。驟^{しやう}雨、烈しい雷鳴、晴れてゆく念場ヶ原に立つあざやかな虹。

薊^{あや}の茎が伸び、松虫草が咲くと、空が青く澄んで、すきとおるような薄い雲が流れる。落葉松が黄褐色に、白樺^{しろば}が輝く黄になると、芒の穂が白く風になびく。

空が厚い灰色の雲に蔽われ、雪が降ってくる。一面の深い雪。縦の木が真っ黒に見え、雪の上に点々と鳥や兎の足あとが交叉する。落葉松の林が、時々、寒そうに身震いして、白い粉をふりまくように雪を払いおとす。

やがて、再び春が廻^{めぐ}ってくる。さて、あの芒は——雪が降ってきた時は、だんだん下から積って、そのまま倒れずにいるうちに、しま^⑦いには、すっぽりと雪の中に蔽いかくされてしまふ。雪がとけると、頭のほうから出て来て、こうして春に残るのである。私はこの弱々しいものの、運命に逆わないで耐えている姿に感動した。

あの時分、どうして私の作品は冴えなかったのだろうか。あんなにも密接に自然の心と溶

① でさえ/ 即使是，同であっても。② と/ 意为というように，前接部分都为后半部所述内容的例示。③ 花をつけた/ 开花。(惯用句) ④ ブーンと/ 嗡嗡声。(拟声词) ⑤ 草いきれがする/ 青草带着热气。(～がする表示人的感觉。) ⑥ ずにいる/ 没。(惯用型，表示人处于某种状态。) ⑦ しまいには/ 最后。

け合い、表面的な観察でなく、かなり深いところへ到達していたはずである。それなのに、私の感じとったものを、すなおに心こまやかに描くことが出来なかった。表現の技術が拙かったのだろうか。いや、それよりも、もっと大切な問題があった。

私は汗と埃にまみれて走っていた。足もとには焼け落ちた屋根瓦が散乱していて、土煙りが舞い上った。汚い破れたシャツ姿のこの一団は、兵隊と云うには、あまりにも惨めな恰好をしている。終戦間近に召集を受けた私は、千葉県の柏の連隊に入隊すると、すぐその翌日、熊本へ廻された。そこで爆弾をもって戦車に肉薄攻撃する練習を、毎日やらされていたのである。そんな或る日、市街の焼跡の整理に行って熊本城の天守閣跡へ登った帰途である。

私は酔ったような気持で走っていた。魂を震撼させられた者の陶酔^④でもいうべきものであろうか。つい、さっき、私は見たのだ。輝く生命の姿を――

熊本城からの眺めは、肥後平野や丘陵の彼方に、遠く阿蘇が霞む広濶な眺望である。雄大な風景ではあるが、いつも旅をしていた私には、特に珍しい眺めというわけではない。なぜ、今日、私は涙が落ちそうになるほど感動したのだろうか。なぜ、あんなにも空が遠く澄んで、連なる山並みが落ちついた威厳に充ち、平野の緑は生き生きと輝き、森の樹々が充実した、たえずまいを示したのだろうか。今まで旅から旅をしてきたのに、こんなにも美しい風景を見たであろうか。おそらく、平凡な風景として見過してきたのにちがいない。これをなぜ描かなかったのだろうか。いまはもう絵を描くという望みはおろか、生きる希望も無くなったと云うのに――歓喜と悔恨がこみ上げてきた。

あの風景が輝いて見えたのは、私に絵を描く望みも、生きる望みも無くなったからであ

① それなのに/ 虽然如此……但……。 (接续词) ② 兵隊と云うには、あまりにも惨めな恰好をしている/ 说他们是士兵, 样子也未免太过悲惨。(あまりにも意为太……。) ③ やらされていた/ やる的使役被动用法。 ④ ~とでもいうべき/ 也可说……。 (でも是提示助词, 表示例示; べき是べし的连体形, 表示可能。) ⑤ ~にちがいない/ 一定……。 (惯用型) ⑥ ~はおろか/ 别说, 不用说。 (惯用型)

る。私の心が、この上もなく純粹^①になっていたからである。死を身近に、はっきりと意識する時に、生の姿が強く心に映ったのにちがいない。

自然に心から親しみ、その生命感をつかんでいたはずの私であったのに、制作になると、題材の特異性、構図や色彩や技法の新しい工夫というようなことにとらわれて、もつとも大切なこと、素朴で根元的で、感動的なもの、存在の生命に対する把握の緊張度が欠けていたのではないか。そういうものを、前近代的な考え方であると否定することによって、新しい前進が在ると考えていたのではないか。

また、制作する場合の私の心には、その作品によって、なんとかして展覧会で良い成績を挙げたいという願いがあった。商売に失敗した老齡の父、長い病中の母や弟というふうに、私の経済的な負担も大きかったから、私は人の注目を引き、世の中に出たいと思わないではいられなかった。友人は次々に画壇の寵児になり、流行作家と云われるようになって行ったが、私はひとりとり残され、あせりながらも遅い足どりで歩いていたのである。こんなふうだから心が純粹になれるはずがなかったのである。

その時の気持をその場で分析し、秩序^⑦立って考えたわけではないが、ただ、こう自分自身に云い聞かせたのはたしかだ。もし、万一、再び絵筆をとれる時が来たなら——恐らく、そんな時はもう来ないだろうが——私はこの感動を、いまの気持で描こう。

汗と埃にまみれて熊本市の焼跡を走りながら私の心は締めつけられる思いであった。いま、考えて見ても私は風景画家になるという方向に、だんだん追いつめられ、鍛え上げられてきたと云える。人生の旅の中には、いくつかの岐路がある。中学校を卒業する時に画

① この上もなく/最,无比。(慣用句) ② なんとかして/设法。 ③ 注目を引き/引起注意。(慣用句) ④ 世の中にしたい/出人頭地。(慣用句) ⑤ ~ないではいられなかった/不能不,不由得。(慣用型,同…ずにはいられない。) ⑥ ~ようになって/变得。(慣用型,表示情况的变化。) ⑦ 秩序立つ/有秩序。(慣用句)

家になる決心をしたこと、しかも、日本画家になる道を選んだのも、一つの大きな岐路であり、戦後、風景画家としての道を歩くようになったのも一つの岐路である。その両者とも私自身の意志よりも、もっと大きな他力^②によって動かされていると考えないではいけない。たしかに私は生きているというよりも生かされているのであり、日本画家にされ、風景画家にされたとも云える。その力を何と呼ぶべきか、私にはわからないが――

① とも/全,都。(接尾词) ② ~によって/表示施动者。(慣用型)

第二章

冬の山上にて^①

① にて/在,于。(格助词,同~において。)

山並みは幾重もの襞^{ひだ}を見せて、遙か遠くへ続いていった。冬枯れの山肌は、沈鬱な茶褐色の、それ自体は捉え難い^①色であるが、折からの夕陽に彩られて、明るい部分は淡紅色に、影は青紫色にと、明暗の微妙な諧調を織りまぜて静かに深く息づいていた。その上には雲一つ無い夕空が、地表に近づくにつれて淡い明るさを溶かし込み、無限のひろがりを見せていた。

人影の無い山頂の草原に腰をおろして、刻々に変ってゆく光と影の綾を私は見ていた。佐貫駅から、この鹿野山まで三時間の山道を、宿泊のための米と絵の具箱を詰めたリュックザックを背負い、画板を抱えて登って来たのである。すっかり汗ばんだ肌に、冷々とした大気が快かった。山上の寺の宿坊に泊めてもらう以外には泊る場所もない。まだ、その頃はバスも通っていなかった。昭和二十一年の冬のことであった。

この広濶な眺望。海原の波の起伏を見るように、心に響いてくる山と谷の重なり。つかの間の夕映えであるにせよ、休らいと救いを約束するかのような静かな空。谷間の夕影の中に、一筋の道が見える。独り山路を登って来て、次々に浮んでは消えていった想念の帰着点に私は立っている。しかし、いま、私の心はいくつもの谷々を越えて、青霞む遠くの嶺へ、更に、その向うの果てしない空へと誘われてゆく。すると、ここはまた、新たな出発点でもあるのか。

① 難い/ 难以……。 (接尾词, 接动词连用形后。) ② その上に/ 另外, 加之。 (惯用句) ③ 一つ無い/ 一点都没有。 (一つ后与否定呼应时, 表示一点都不……、毫不。) ④ ~につれて/ 随着……。 (惯用型) ⑤ 腰をおろして/ 坐下。 (惯用句) ⑥ 汗ばむ/ 微微出汗。 (ばむ接体言、动词连用形等后, 表示微有、常用等。) ⑦ つかの間/ 瞬间。 ⑧ ~にせよ/ 即使, 不管。 (せよ是する命的命令形。) ⑨ 浮んでは消えていった/ 忽隐忽现。 (~ては~是惯用型, 表示动作反复交替进行。)

佐貫の駅から、ここへ来るまでのことを話さねばならない。三時間の行程の間に、私は長い回想の年月を辿ってきた。

ところどころに、重厚な土蔵造りの家の残る町並みははずれると、道はすぐ山へさしかかった。その、とある一軒の暗い戸口から、煤けた柱に掛る古い柱時計を見た時、郷愁に似た想いが、私の心を締めつけた。白髪の小柄な老婆が、眼鏡をかけて、繕いものをしている姿を見た———と思った。

私は両親の家に行った。それは、やはり土蔵造りの家ではあったが、神戸市の下町の、倉庫の並ぶ海岸近くに在って、この佐貫の町に見るような、重苦しい感じのものではなかった。柱も煤けてはいなかった。ただ、柱時計は、かなり古風なもので、家の人が踏み台に乗って、文字盤の長針を指で廻しながら、ボンボンと音をたてて時間を合せていた。あの、時計の音と共に懐かしいのは、腹に響くような太い汽船の警笛と、小刻みな小蒸気艇のエンジンの響き。それから、岸壁にひしめき合って揺れている帆柱の、ギイギイと鳴る音である。

母は、柱時計の下で繕いものをしていた。いつも、きちんとした身なりの人であった。表の入口から、一直線に土間が奥へ続いていて、裏に近く台所と井戸があった。台所の天井は二階へ吹き抜けになっていて、二階の裏窓からのぞくと、ものを煮たきする匂いが上ってきた。子供部屋は二階であった。あの匂いが漂ってくると、間もなく、

「御飯においで」と母の声が聞えてくるのだった。

家の表には、「東山商店」という小さな真鍮の看板が掛けてあって、店の土間には、ペンキの罐、ランプ、轆轤、ロープ、錨などが積み重ねられていた。壁には、汽船や船渠の写

① ~ねばならない/ 必须。(同口语的~なければならない, ね是否定助动词ぬ的假定形。) ② とある/ 某个。(连体词, 同ある。) ③ 音をたてて/ 发出声音。(惯用句) ④ 時間を合せていた/ 校准时间。 ⑤ きちんとした身なり/ 穿得整整齐齐。 ⑥ おいで/ 快来。(おいでなさい的省略形, 来い的亲密或轻微尊敬的说法。)